慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	内田忠夫・ 栗林世・ 矢島昭・ 渡部経彦著 経済予測と計量モデル
Sub Title	
Author	佐藤, 保
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1967
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.60, No.4 (1967. 4) ,p.456(106)- 457(107)
JaLC DOI	10.14991/001.19670401-0106
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19670401-0106

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

をめぐらすであろうということである。しかしわたくしにとって、従来、疑問でならなかったのは、「初期マルクス」と、それ以後のマルクスとを決定的に区別するものは何かということである。観念論から唯物論へ、革命的民主主義から共産主義への変化、その思想上の転換を決定的ならしめたものこそ、一八四八年の革命ではなかったろうか。この革命以後のヨーロッパ資本主義の発展があってはじめて「資本論」が生まれてくるのではなかろうか。

以上のようなことを考えながら、わたくしは本書をよみ耽った。われわれはさきに、同じソヴェートの研究者ローゼンベルクのすぐれた業績「初期マルクス経済学説の形成」（青木書店、副島種典訳一九五七年）をもっている。本書は、まことにこれと好一対であり、マルクスの哲学体系の樹立の全過程を克明に分析したものであり、マルクス主義研究者には一読の価値がある。もっとも興味深く教えられるところの多かったのは「疎外論」であるが、とくに第一部のはじめに、少年時代から青年時代にかけてのギムナジウム期のマルクスについての考察は詳細である。

しかし、このギムナジウム時代からヘーゲル哲学への深酔、そしてやがてその批判克服の過程における人間マルクスの苦悩はどのようにあらわれたのかが明らかではない。宗教との闘い、信仰と理性、宗教と科学との関係において、初期のマルクスは、いかに悩み且つこれらの問題を克服していったのか。批判と克服の事実については詳細に書かれているけれども、マルクスとエンゲルスという二人の巨人の内心の葛藤、その思想的な煩悶は一体どのようであったのであろうかと考えるとき、本書の著者はどう考えたのであろうか。もちろん、マルクスとエンゲルスは、J・S・ミルのように「自叙伝」を残さなかったし、従ってまた彼にみるような「二〇歳の憂愁」というようなものについて、具体的にのべてはいないけれども、初期のマルクスには、そのようなものがなかったはずはない。「初期マルクス」の研究は、このような点からも考察されるべきではないだろうか。その意味で、本書も、マルクスとエンゲルスをやや理想化している欠点が目立つ。しかし詳細な研究である。一読に値する。（勁草書房・一九六五年刊・B6・全二冊・八一七頁・一九二〇円）

—飯田　鼎—

一〇六（四五六）

内田忠夫・栗林　世
矢島　昭・渡部経彦　著

『経済予測と計量モデル』

計量経済学の書物ではその方法を主体とするものと、実際の経済モデルの構成を主とするものとがあるが、本書は後者に属し、実際に日本経済の短期予測のモデルを構成している。この種のモデルについて興味ある人にとっては、よい参考となろう。本書の目的はまえがきに述べられている。「短期経済予測が有効に行われ、それが適切に経済政策に反映されていくことによって、少しずつではあっても、（そしてかなり迂遠な方法であっても）私たちの生活が豊かになる手がかりになればというささやかな希望が、本書をつくった一つの動機となった。確かに一九五〇年代からの計量経済学（エコノメトリックス）の進歩は、理論的にも応用的にも大きかったし、そして多くの経済学者たちの共有財産となりつつある。しかし予測という複雑な現実と密接に関係した問題を扱うのにはまだ〝ひよわ〟な面が多すぎるかもしれない。こういった状況判断での行動原理としては、常に do-nothing か、試行錯誤の積み重ねかの選択が私たちに要求される。そして私たちは、まさに後の道を選んだわけである。」と書かれている。本書は8章からなり、第1章、経済予測の一般的考察で予測とは何かという問題をとりあげ、第2章、昭和40・41年度見通しとその評価、でモデルによる予測方式を日本経済に適用した結果とその評価が具体的に示される。第3章、推定されたモデルとその理論的性質、第4章、構造方程式のスペシフィケーション、第5章、モデルのテスト、では予測に使われたモデルの理論的基礎と具体的なスペシフィケーション及びその説明力に関するやや詳細な記述が行われる。第六章、シミュレーション分析、では政策効果の9分析を中心とする、いくつかのシミュレーション結果の紹介がある。第7章、統計的方法と計算プログラム、第8章、予測誤差の分析、ではモデル分析に関する統計的方法、予測誤差および計算プログラムの設計等のやや技術的問題がとりあつかわれている。全体として日本経済の最近の様相を知るには非常に好都合であるが、その背後の統計的計算方法を知るには頁数の関係もあってやや簡単難解といえるであろう。最後に本書の強調する点は、「経済予測という問題は、往々にして予測値の正確さということだけで評価されがちである。私たちがここで取上げた研究は、単に予測値の正確さということよりは、理論的に構成されたモデルを定量的に操作可能な形に変換してゆく過程についての研究である。」ということである。（日本経済新聞社・昭和四一年一一月刊・B6・二五三頁・九四〇円）

—佐藤　保—

＊　＊　＊

浜林正夫著

『イギリス革命の思想構造』

八年前に刊行された著者の『イギリス市民革命史』は、イギリス市民革命の政治過程、革命の経過を追ったものであったが、本書はイギリス市民革命期の思想家の類型を設定し、これを市民革命のなかで位置づけ、近代思想の成立を革命の思想との関連でとらえようとしたものである。

本書収録論文の大半は、昭和三一年から最近までに「歴史学研究」、「商学討究」、小樽商大「人文研究」に発表された独立の論文であるが、本書を貫ぬく著者の基本的視角は、序章「思想の革命と革命の思想」のなかに端的に示されている。ホッブスにおいて開花する近代思想は、市民革命によって成立したものでありながら、実は当初から革命を拒否するものであった。近代思想といわれるものは革命思想のなかからその革命的部分を切りおとしたところに成立する。市民革命の成果だけをつみとった階層、ブルジョア・ジェントリーの思想が近代思想であるならば、市民革命の渦中にあって、これを押し進めた「革命の思想」とは何であったのか。本書で著者が据えた視角はこれである。

第一章「ピューリタニズムの思想」においてジョン・オウエンの思想が分析され、以下第二章「ヒューマニズムの思想」、ウィリアム・チリングワース、第三章「経験論の思想」、ジェームズ・ハリントン、第四章「神秘主義の思想」、ジョージ・フォックス、第五章「平等派の思想分析」、ジョン・リルバーン、ウィリアム・ウォールウィン、リチャード・オーヴァトン、第六章「十八世紀への展望」、レイフ・カドワース、ウィリアム・テンプル、ジョン・ロックが分析されている。これら十人の思想家について著者の分析を逐一紹介する余裕はないので、ここでは著者の